

ベルクソンとメルロ・ポンティの身体論

中 富 清 和

問題の所在

現代の哲学において心身二元論が最も困難な問題の一つであることには説明を要しない。ベルクソンによれば、これは絶えず問題にされているが、実際にはほとんど研究されたことがない(MM, 4)。では、この伝統的な難問はいかにして克服されるのであるうか。ベルクソンは『物質と記憶』において、この問題を真向から取り上げその解決を試みている。彼は、物質の極として「純粹知覚」(perception pure)、精神の極として「純粹記憶」(souvenir pure)を仮定し、人間とはこの純粹知覚と純粹記憶の弁証法的総合であるとした。そして、身体とは創造的行為を為す「行動の中心」(centre d'action)であり、純粹知覚と純粹記憶が交流する点、即ち物質と実在の交差する場であることを論証した。

それは哲学史において衝撃的な出来事であった。しかし、その考察は、心理学、生理学、生物学的であるために、実存哲学の立場からはある種の不足を感じることは否定できない。その欠如を素早く見抜いたメルロ・ポンティ(以下、ポンティと略する)は、受肉した実存としての身体から出発して、即自と対自の融合を旨指した。ここに我々は心身二元論克服の大きな前進を認めることができる。ところで、一般的にポンティは現象学的哲学者の最も優れた一人と見なされている。⁽¹⁾『知覚の現象学』の前書きは、まさに一種の現象学的信仰簡条とも言えよう。確かに彼の哲学が現象学の思考様式に属することに疑いの余地はない。しかし、ポンティの哲学はフッサールの現象学、ハイデガーの実存哲学だけに基づくのではない。彼の哲学の出發は心身二元論との対決であって、それはベルクソンに由来する。それ故、ベルクソンからの影

響は、フッサール、ハイデガーのそれに先行するものである。この論考ではポンティにおけるベルクソンからの影響を取り上げ比較考察してみたい。まず、ポンティのベルクソン研究の跡をたどってみよう。

一、ベルクソニアンとしてのポンティ

哲学的にはポンティはフッサールの現象学の系譜に位置づけられるが、Geraetsの研究によれば、ベルクソンとの出会いはフッサールに先んじている。というのは一九二四〜二六年までポンティは高等師範学校 (*École Normale Supérieure*) の受験準備をするが、この時期に彼はベルクソンを熱心に読み、メーヌ・ドゥ・ピラン全集の編集を始めていた *Pierre Tisserand* の講義に出席していた (Geraets, 5)。さらに彼は『物質と記憶』一特に第一章一に対して早くから心酔し、またベルクソンの「哲学的直観」 (*L'intuition philosophique*) や「変化の知覚」 (*La perception du changement*) に関するプログラムから刺激を受けて真の哲学を探究した (Geraets, 6)。

これに対してポンティがフッサールの現象学と最初に出会ったのは、ソルボンヌにおける *Georges Gurwitsch* の講義においてである (Geraets, 7)。この講義は一九二八〜三〇年において行われ、そのテーマは現代ドイツ哲学 (フッサール、ラスク、ハイデガー) についてであった。こうして見るとポンティはフッサールよりベ

ルクソンを四年ほど早く知っていたことになる。しかも一九二八年にはベルクソンがノーベル文学賞を受賞したが、その事実はベルクソンへの興味を一層強めたにちがいない (Geraets, 6)。こうしてポンティはベルクソニアンとして哲学を始めたのであり、そのベルクソンへの志向が後にフッサールの著作の選択的な読み方を規定したと思われる (Geraets, 6)。彼の代表的著作である『行動の構造』はヴァーレンがその序文で指摘する通り「科学的な経験の水準」に位置していることから (SC, XIII)、「生理学、心理学、生物学的要素が非常に強いが、このように科学を援用する方法は、ベルクソンのものである。またポンティの著『知覚の現象学』も、後述するが、そもそもはベルクソンの知覚理論に基づいている (『思想』46)。ここに我々はベルクソニアンとしてのポンティを認めることができる。

ではその後ポンティはどのような方向へ向かうのであろうか。言うまでもなくフッサールの現象学であるが、Gurwitschの講義の後、ポンティはフッサールの講義に出席する (Geraets, 7)。この講義はソルボンヌのデカルト講堂において (一九二九年二月三〜二五日) 四回に渡って『超越論的現象学入門』 (*L'introduction à la phénoménologie transcendantale*) のテーマで行われた。これは後に『デカルト的省察』 (*Méditations cartésiennes*) として公刊される。この講義はドイツ語で話され、当時ポンティはドイツ語を解さなかったにもかかわらず列席し、これ以後ベルクソ

ンから次に歩むべき哲学研究の道を発見したと思われる (Gereats, 7)。以上、若きポンティイの思想形成を考察して来たが、次に彼の哲学そのものの生成を検討してみたい。ベルクソン、フッサール、ハイデガーからどのような影響を受けているのであろうか。そこで、身体を論ずる前に、身体に先立つ物質一般の概念あるいは物質が現われてくる地平を考察しなければならない。それはベルクソンで言えば「イマージュ」(image)であり、ポンティイでは「現象野」(champ phénoménal)である。

二、イマージュの世界と現象野

ポンティイは身体論を展開するに当たって、まず客観的世界の手前にある「生きられた世界」(monde vécu)、現象野の概念を設定する。それは我々に直接経験を見い出さしめる地平であり、物質一般が開示される素朴な世界である。ポンティイはこれを主知主義と経験論批判を通して明確にして行く。ところでベルクソンのイマージュも観念論と實在論の止揚から導出された物質概念、地平概念である。それは、「観念論者が表象と呼ぶものよりはまさっているが、實在論者が事物と呼ぶものよりは劣っている存在」事物と表象の中間にある存在 (MM, 1)、「観念論や實在論が存在と現象に分けてしまう以前の物質」(MM, 2)である。観念論も實在論も共に超越的自我を構成し、対象を概念化する。それは対象を平準化、形骸化し、生きた個性を喪失させる。(こうした観念

論、實在論に対するベルクソンの批判をポンティイも受け継ぎ「知覚の現象学」の序論の中で、主知主義、経験論を批判し、伝統的な偏見を破壊(現象学的破壊)している。)その反省からベルクソンはイマージュを考案したが、我々の世界とは「イマージュの総体」(ensemble d'images)であり、我々の身体もイマージュである。しかし身体は行動する主体のイマージュとして世界において特権的な地位を有するのである (MM, 20)。こうしたイマージュの説明は『物質と記憶』の第一章になされているが、高等師範学校の入学準備期において、ポンティイはこの書に心酔し、第一章に賛意を示している (Gereats, 6)。とすれば当時彼には物質とは何か、知覚世界とは何か、という疑問があり、その答えを『物質と記憶』の中に発見したものと思われる。しかし實在論と観念論の中間的存在であるイマージュにおいて、その中間が具体的に問われた場合、曖昧さを避けることはできない。ポンティイは、この曖昧さに気づいて厳密な表現を求める。一九三六年にポンティイはサルトルの処女作「想像力」についての短い書評を書いているがその中で次のような見解を付け加えている。

「たとえば『物質と記憶』のイマージュにもっと深い意味を見出すことも可能である。ベルクソンは世界をイマージュの総体だと述べることによって、物は「意識の諸状態」に解消されてもならないし、我々に見えているものを超えた実体的實在のうちに求められてもならないということを強調しよ

うとしたのである。これはたとえひどく正確さを欠いた言葉によってであるにせよ、まさしくフッサールのノエマを予知するものであらう。……」〔思想〕31~32)

ここに我々はポンティのイマージュ理解とフッサールへの接近を認めることができる。とすれば知覚された世界への関心が『物質と記憶』によってかきたてられた事は確かであり、ポンティはベルクソンの説くイマージュを「知覚された存在」(être perçu)と見なしたのである。そこで、このイマージュの総体についての記述を知覚の用語によって表わし、現代の心理学、生理学の成果を動員して一層包括的な形で仕上げたのが『知覚の現象学』である(『思想』36~37)。その際、哲学的に厳密な方法を提起してくれたのが現象学であった。従ってその現象学的理解はベルクソンの枠組に規定されていたと言える(『思想』37)。ポンティは早くからフッサールの後期思想を理解し、『危機』に展開される「生活世界の現象学」の中に期待していたものを発見したのである。では彼が見出した「生活世界」(Lebenswelt)とは、どのようなものか。

生活世界とは、それ自体としては最もよく知られたものであり、経験によって我々になじまれているものである(Krisis, 126)。それは我々に直接与えられた世界であり、目を開ければ存在している素朴な世界である。そしてあらゆる学問は生活世界の自明性の上に建てられており(Krisis, 128)、それは客観化、分析化され

る以前の根源的な世界である。従って、この生活世界はベルクソンのイマージュの世界に他ならない。そしてこの二つの概念を止揚し総合したのが現象学である。それはフッサールの現象学的還元(phenomenologische Reduktion)により開示された地平、あらゆる偏見、固定概念を排除した「生きられた世界」であり、あらゆる学問が成立する基盤である。ここにおいて我々の真の生きた経験が成立し、ポンティはそれを「知覚経験」(experience perceptive)と名付けた。この知覚経験の発見こそポンティの偉大な発見なのであって、長い哲学史の中でデカルトの cogito の発見に匹敵する意義がある。もちろんその経験は、ポンティ自身が『知覚の現象学』の中で指摘しているように、ベルクソンの実在の直観と同じものではない。というのは、ベルクソンの知覚理論は現象学的還元を受けておらず、それ故、依然として古典的哲学の域に留まっているからである。フッサールの現象学では神・超越者も現象学的還元を受け遮断されるが(Ideen, 138~140)、そうした態度はポンティにおいて一層鮮明になる。即ち、ベルクソンの持続、実在(これは『道徳と宗教の二源泉』において神となる)の拒否である。ポンティの目指すのは、あくまで「生きられた世界」への還帰、知覚世界の生きた存在との交流なのだ。そして知覚・感覚とは私がまわりの風景・世界と受肉することであり、私と世界とが生活的な交流をし、世界が私にとってなじみ深いものとして現われてくることである(Pr. 64~65)。こうした知覚経

験が現われる地平が現象野であり、それは実在を拒否した「イマ―ジュの世界」と「生活世界」の弁証法的総合によって確立されたのである。そしてここに我々はポンティのベルクソンからの影響を認めることができる。しかし、その影響はこれだけに尽きるのではない。さらに重要な点においてその影響を指摘することができる。それはベルクソンの失語症研究とポンティの幻影肢 (membre fantôme) 研究、即ち、記憶の実在と世界内存在 (être au monde) の証明である。

三、記憶の実在と世界内存在の証明

ここではベルクソン、ポンティ共にそれぞれの最も重要な概念を、生理学研究の成果を用いて証明していることを示したい。ベルクソンの記憶理論とポンティの世界内存在の概念は直接的に結びつくものではない。むしろ、ポンティは記憶を実在とするベルクソンの記憶理論を否定するであろう。しかし、世界内存在をさらに具体的なものとして提起するために、ポンティは幻影肢やシュナイダー症を取り上げ、そこから世界内存在を証明する。この手法はベルクソンの失語症研究と通じるものがある。Tilletteはポンティの幻影肢研究、シュナイダー症研究を、方法と内容が一体化しているとして高く評価しているが、その発想の源泉はベルクソンである。

ベルクソンは身体的記憶 (souvenir du corps) と独立的記憶

(souvenir indépendant) の存在を仮定し、この独立的記憶即ち純粹記憶 (souvenir pur) は脳細胞に付着するものではない事を、様々な失語症研究を通して論証した。そしてこのテーゼは、数十年を経てカナダの脳外科医ベンフィールドによって証明されたのである。⁽⁵⁾ この事実はベルクソン哲学だけではなく哲学・宗教全体においても非常に重要な意味を持っている。というのは持続、精神の実在が証明されたからである。既に『時間と自由』(Essai sur les données immédiates de la conscience, 1889) において持続が分割不可能な意識の相互浸透、流れであることを心理学的に論証しているが、それは心理学の範囲に留まる。既にスペンサーの進化論の影響を受けたベルクソンにとって、持続の心理学を生命の形而上学まで発展させるには、さらに確固とした基盤が必要であった。即ち、心理学的証明だけでは学問的根拠が弱く思ったに違いない。それで彼はさらに具体的、実証的な生理学に根拠を求めた。それが彼の失語症研究であり、それに基づいた彼の記憶理論は現代の脳生理学の吟味に耐えうるものであった。こうしたベルクソンの態度は、哲学と科学がますます分離、分化して行く現代においては貴重であると言わねばならない。そして重要な事は、この姿勢をポンティも取っていることである。ポンティは身体を世界内存在 (être au monde) と規定しているが、言うまでもなくこれはハイデガーの In-der-Welt-sein に由来する。ハイデガーの世界内存在を引き継いだポンティは、豊富な生理学

的知識を駆使してさらに具体的、確実なものとして行く。その証明に用いるのは、主に幻影肢とシュナイター症の例であるが、この論考では幻影肢研究について取り上げた。

幻影肢 (*membre fantôme*) とは四肢の切断手術を受けた人が、すでに無いはずの四肢に痛みや痒みを感じる現象である。従来の説明では、切断部位の神経刺激の伝達ミスとする末梢説 (*theorie peripherique*, Pp. 90) と大脳痕跡の異常に起因する中枢説 (*theorie centrale*, Pp. 90) に依っていたが、これらでは説明されず、生理学的条件と心理学的条件を合わせた幻影肢の混合理論 (*theorie mixte du membre fantôme*, Pp. 92) が持ち出された。しかし一方は空間内に存在するへ生理的事実、他方はどこにも存在しないへ心理的事実、つまり物質的事実と心的事実、(即自) とへ対自) などのようにかみ合うのか説明することができない。これはデカルト、いやプラトン以来の二元論の問題である。こうした心理学、生理学において解明不可能な幻影肢をポンティは世界内存在から見事に説明する。世界内存在とは世界の中に属し、住まうことであるが、それは単に住まうということではなく、世界へ向かって住まい、しかも世界に根ざして存在するという意味である。それは生命全体に流れる「実存衝動の或る種のエネルギー」 (*certainne energie de la pulsation d'existence*, Pp. 95) つまり「実存エネルギー」が世界へと流れ続けており世界と結びついて在るということである。それを裏付けるのが代償行為である。例

えば Trendelenburg の例では (大脳領域が部分的に切除され、また中枢と肢体を結ぶ神経路が切断されて、動かない肢体が緊急の際には動き出す事例 S. 6)、神経生理学的には説明が余りにも複雑で不可能に近いが、生命体の生きんとするエネルギー、実存エネルギーの発動、世界内存在の運動が説明を可能にする。つまり生命体には、生命エネルギーとも言うべき根源的実存エネルギーが常に世界へ向かっていて、肢体が失われても、なお流れ続けようとする生の流れが代償行為を可能にする。そしてこの世界内存在の実存エネルギーが肢体の消失を拒否するのである。ニーチェの「力への意志」 (*Wille zur Macht*) とも呼べる生きんとする衝動を有する人間は、常にこの実存エネルギー、ヘルクソンの「生の流れ」「実在」あるいは「生の躍進」 (*élan vital*) を世界へと放射し、この生エネルギー、エランが肢体の欠損をはねのけ幻影肢を生じさせるのである。

では、こうしたポンティの幻影肢研究は現代の生理学・医学から見た場合、今なお意義を有するであろうか。Melzack によれば、幻影肢が生ずるのは、末梢のメカニズム、交感神経系のメカニズム、精神的メカニズムの複合的な作用の上に、肢体切断に起因する神経インパルスの異常パターンが大脳を刺激することによる。しかし、これらすべての要素は具体的にどのように関与しているかは解明されていない。そして幻影肢は、これらのただ一つのメカニズムだけで説明する事は不可能であり、身体的メカニズムと

精神的メカニズムの総合的な立場に立たなければ理解されぬ現象である。それで、身体と精神の総合的立場を取るポンティの幻影理解は正しいと言えるだろう。またポンティが『知覚の現象学』において用いている幻影肢の症例も Melzack のそれと共通しており十分な生理学的、医学的根拠を持つ。こうして幻影肢研究の成功は、ポンティの最も重要な世界内存在を科学的に証明し一層確実、明確にするものである。

以上、我々はヘルクソンとポンティの身体論を考察して来た。両者とも身体と精神の総合を試み、それぞれ重要な概念—記憶の实在と世界内存在—を生理学、科学を用いて論証する態度において非常に共通するものがある。そして、その研究は現代の科学の吟味に十分耐えられるものである。従ってヘルクソン、ポンティ共に哲学と科学に対する先見性は評価されるべきであり、今後とも研究される意義が大いにある。心身二元論の克服は両者の研究を通ることなくしては不可能である。最後に両者の相違を指摘して終える。それは、ヘルクソンが身体を純粹知覚と純粹記憶の弁証法的総合と定義するが、それは二元論から一元論への移行であるのに対し、ポンティは最初から徹底して世界内存在から出発する一元論である。その内存在とは合理的でもあれば非合理的でもある実存の凝固した姿である。

文中の参考文献は次のように略記する。なお数字はページ数をあらわす。

MM: Henri Bergson, Matière et mémoire, P. U. F. 1896, 92^e édition.

Geraets: Theodore F. Geraets, Vers une nouvelle philosophie transcendante, La genèse de la philosophie de Maurice Merleau-Ponty jusqu'à la Phénoménologie de la perception, Martinus Nijhoff, La Haye, 1971.

PP: Maurice Merleau-Ponty, Phénoménologie de la perception, Gallimard, 1945.

SC: Maurice Merleau-Ponty, La structure du comportement, P. U. F. 1942.

Ideen: Edmund Husserl, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch, Husserliana, III, 1950.

Krisis: Edmund Husserl, Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, Husserliana, VI, 1954.

『思想』: 木田三善『メルロ＝ポンティの思想』岩波書店 一九八四年

(1)(2) Remy C. Kwant, The Phenomenological Philosophy of Merleau-Ponty, Duguese Univ. Press, Pittsburgh, Pennsylvania, 1963. (高浦静雄「竹本貞之」箱石匠行訳『メルロ＝ポンティの現象学的哲学』国文社 一九七六年 p. 268)

(3) ポンティはこの二つの概念の中にヘルクソンとフッサールの哲学の共通性を見出しに違いない。両者は方法的に全く相違しており公式な交信も見当らぬが、にもかかわらず「生」の方向性が一致しているのは単なる偶然であろうか。これは哲学史の新しい問題提起になると思われる。

(4) Xavier Tilliette; Merleau-Ponty ou la mesure de l'homme,

Editions Seghers, Paris, 1970 (木田元、篠憲二訳『メルロ＝ポ
ンティあるいは人間の尺度』大修館書店 一九七三年、p. 43)

(5) 詳しくは拙稿「メルクソンの記憶理論と脳生理学」(『比較思想研
究』第十二号)

(6) Ronald Mezack, *The Puzzle of Pain*, Penguin Books,
1973 (橋口英俊、大西文行訳編『痛みのパズル』誠信書房 一九八
三年)。詳しく内容については紙面の都合上、割愛する。他に、
Paul Schilder, *Das Körperschema*, Julius Springer, Berlin,
1923 (北條敬訳『身体図式』金剛出版 一九八三年)を参考にし
た。

(なかとみ・きよかず、哲学、千葉市立稲毛高校教諭)